OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	がんの動向 ： 減ったガン・増えたガン
Author(s)	田口, 鐵男
Citation	癌と人. 1977, 5, p. 4-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

がんの動向—減ったガン・増えたガン—

常任理事　田　口　鐵　男*

—ガンの動向—

がん制圧は文字通り国民の悲願である。がんの研究，診療に日夜のない医学徒としても，その願いに変りはない。

さて，日本のがんの最近の動向はどうなっているのでしょうか。

日本の全死亡数に対して悪性新生物（広義でのがん）による死亡が占めている割合は，最近の人口動態統計によると，男で約20%を女で約18%であり，いずれも脳血管疾患についで死因順位第２位である。

この死亡率の年次推移を見るために，訂正死亡率を求め年度別に比較してみると，図１に示すようになる。すなわち，悪性新生物による死亡率が最高値を示した年は，男では昭和44年，女では昭和34年であったことがわかる。比較的最近の傾向として，男ではゆるやかな上昇カーブを昭和44年の人口10万対97.7という値までのぼりつめ，ひとまず峠に達し，あるいは峠を越したかに見受けられる。女では同様の上昇ののち，昭和34年の人口10万対79.7という値を頂点として，すでにゆるやかな下降線上にあるといえる。

—胃ガンの動向—

胃癌についてはどうなっているでしょうか。胃癌では男女の訂正死亡率年次推移がよく似た

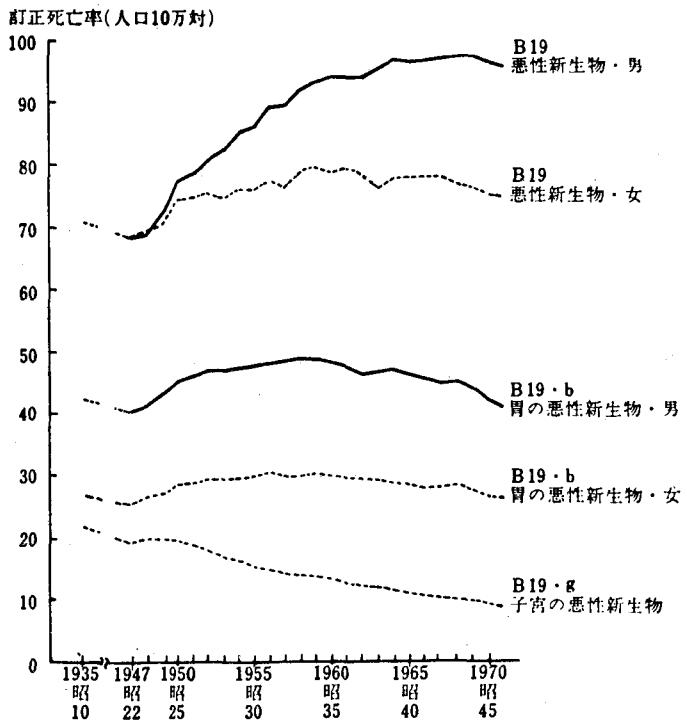

図１．悪性新生物の性別訂正死亡率（基準人口は昭和10年の日本人口）

* 大阪大学教授（微生物病研究所附属病院外科）

形をとっております。死亡率の数値そのものでは，男は女の約1.5～1.6倍である。しかし男女とも図1に示すような同様のパターンを示している。胃癌の訂正死亡率年次推移でピーク値を示した年次は男では昭和33年，女では昭和31年であった。男女ともそれぞれのピーク値以後はゆるやかな下降傾向を示しているが，ごく最近はやや下降が促進されているように見受けられる。

—子宮癌の動向—

次に子宮癌について訂正死亡率の年次推移を見ると，昭和25年以降一貫して下降を続けている（図1）。このように癌による死亡，その死亡危険が足踏み，ないしは多少下ってきたようにも思われる。とくに子宮癌についてはハッキリと低下傾向にあるといえると思う。子宮癌や胃癌による死亡率が低下傾向を示しているのは，それぞれの癌に対する早期発見と治療方法の進

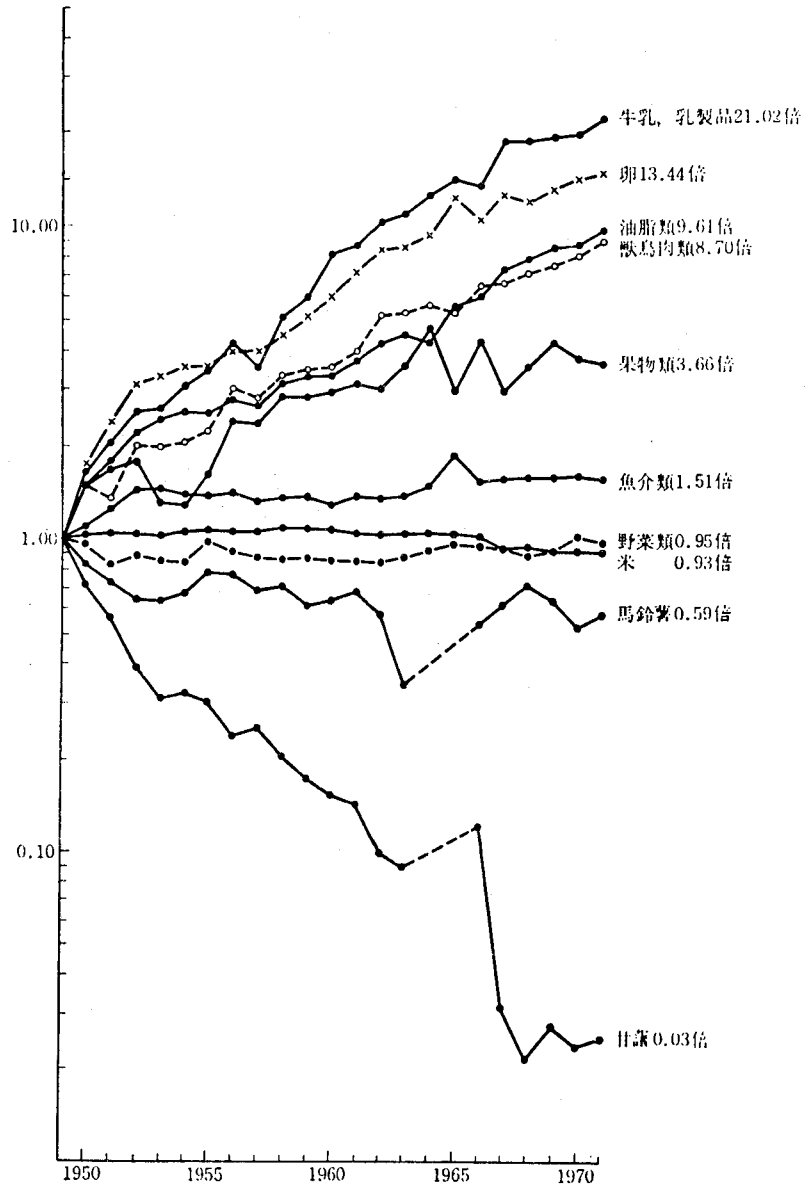

図2．食品群別摂取量年次推移　日本全国（1946=100）　1949～1971

歩によるものと解釈できるようである。

たしかに，20年前から日本では，ガン対策の焦点を胃癌と子宮癌にしぼってきました。集団検診による早期発見計画，早期受診をすすめる大衆教育にしても，また専門家の育成や研修にしても，この２つの癌にしぼってやってきた。その成果がこの２つのがんの減少に反映してきていると考えてよいであろう。しかし，それ以外にも重要な要因もみのがせない。

子宮癌の場合，住生活の進歩として，自宅に風呂，シャワーをもつものの割合は急激にのび，個人衛生，清潔度が向上したことが子宮頸癌の予防に直結していると考えられる。

胃がんの場合では，食生活の変化が重要な要因になっていると考えられる。日本人の食生活は，まったく劇的といっていいほどの変化を戦後みせている。すなわち，国民栄養調査成績から追ってみると，牛乳，乳製品の摂取量は実に21倍になっている。卵の13倍，油脂類の10倍，獣鳥肉類の９倍，果物類の４倍が，それにつづいている（図２）。これらは，いずれも胃がんの発生に抑制的に作用する食品である。ＷＨＯも，バランスのとれた食生活をとれば，胃ガンは減ってくるであろうと見解をとっている。

要するに，日本人の食生活も，住生活も，戦後大きく変化し，なお，その変化はつづいている。その生活の大変化が基盤となって，ガン対策を集中したこととあいまって，胃ガンと子宮ガンという，日本人のワースト２大ガンが制圧の方向をたどりつつあるというのが実態である。しかし，大都市に較べて郡部ではいまだ胃ガン，子宮ガンの減少の割合が小さいといわれる。今後の課題の一つである。

―近年増加傾向にあるガンの種類―

胃ガン，子宮ガンが制圧方向にむかっているというのに，一方，肺ガン，膵ガン，乳ガン，白血病などが増加する傾向にあるといわれている。せっかく胃ガンや子宮ガンによる死亡率が低下しつつあるというのに大変困ったことである。

肺ガンは過去20年間に，70才以上の高令者では男女とも死亡率として，約７～８倍，あるいはそれ以上にふえているといわれる。

肺ガンによる死亡率の上昇の原因は恐らく多様であろう。診断の精度が向上したことも十分推察できるが，喫煙との関係，とくに紙巻たばこの喫煙量との関係を求める必要もある。また大気汚染との関連についてはさらにつっこんだ研究検討が必要とされている。

肺ガンの場合，胃ガンの分布と異なり，全国に孤立的に高頻度発生の市や郡があるということである。とくに，大都市および大平洋沿岸沿いの工業地帯に肺ガン高率の市，郡が少なくないことは注目に値する。また，漁港を中心とする市，郡にも高いこと，鉱山地帯に，肺ガンの高率の市，郡がいくつか見られることも指摘されている。

次に白血病についてみると，やはり年次推移として死亡率の上昇が見られる。訂正死亡率として過去20年間におよそ２倍となっている。死亡率の増加傾向は年令的には50才以上で著しい。

次に膵ガンは過去20年間に男女とも訂正死亡率としてみるとき，およそ５倍も増加している。男は女のおよそ 1.5倍前後である。

また，大腸ことに直腸，結腸のガンによる死亡率が年次推移としてみるとき，過去20年間に約 1.5倍に増えている。

さらに，男女とも泌尿器の悪性新生物，男性性器の悪性新生物，卵巣の悪性新生物は，過去20年間に訂正死亡率として約２倍程度の上昇が認められている。

以上のように，日本の癌についてみ年次的推移をみると，明らかに死亡率が増えたものと減ったものがある。これらを国際的にくらべてみるとどうでしようか。

―世界各国のガンの動向―

1972年，日本における悪性新生物全般による死亡率は人口10万あたり 118.6でありました。一方，アメリカでは 163.2で約 1.4倍である。イングランド・ウェールズブは242.6で約２倍，ドイツでは233.7で同じく約２倍，フランスでは215.0で約1.8倍，イタリヤは187.0で約1.6倍であった。

胃ガンについてみると，日本の死亡率に対し

てアメリカは0.16倍，イングランド・ウェルス0.55倍，ドイツ0.78倍，フランス0.44倍，イタリア0.67倍というように，いずれもかなり低い傾向である。

子宮ガンでは日本に対して米国はほぼ同率，イングランドは1.26倍，ドイツ1.6倍，フランス1.34倍，イタリア1.43倍となっている。

乳ガンでは日本が人口10万あたり5.1であるのに対して，アメリカ5.5倍，イングランド8.7倍，ドイツ6.5倍，フランス5.7倍，イタリア5.1倍を示している。

肺ガンでは日本に対してアメリカが約2.9倍，イングランド5.6，ドイツ3.1倍，フランス2.1倍，イタリア2.5となっている。

白血病では，やはり日本に対して米国が2.3倍，イングランド1.8倍，ドイツ約2倍フランス2.3，イタリア約2倍となっている。

—おわりに—

日本におけるガンの動向を述べたが，減りつつあるガンのあることは喜ばしいことであるが，決して満足すべき状態ではない。現に胃ガンの全ガン死亡に占める割合を考えるとき男では42.6%，女では34.9%となっています。この高い占有率をどのようにしたら制圧できるのであろうか。

また，近年増加しつつある多数のガン対策はどうしたらよいのであろうか。それぞれのガンに対する特有の対策もたてないと到底制圧できないと考えられる。

すなわち，現在，やっている対ガン運動の他に増加しつつあるガンに対する第2，第3の制圧戦線をつくってゆかねばならない。